

南原繁の言葉と戦後日本の出発点（東京大学出版会PR誌『UP』〇七年三月号所収）

歴史に残る奇跡のような会

『南原繁の言葉——八月十五日・憲法・学問の自由』は、昨年八月十五日に東京大学安田講堂に超満員の聴衆を集めて開催された「八月十五日と南原繁を語る会」の全記録である。

あの会はいま思い返しても、よくぞあんな会が実現できたものだと思議な思いがこみ上げてくる、奇跡のような会だった。

参加した法学部名誉教授の一人が言っていたことだが、「こんな会は二度と開けない。この会は東大の歴史の一ページとして残るだけでなく、日本の歴史の一ページとして記録される」ような会だったと思う。

いくつかの歴史の偶然が重なって、あのような会が可能になった。

まず、個人的偶然から書いておけば、その前年（〇五年）の八月十五日ちよつと前に、七年余りかけて「文藝春秋」に連載を続けてきた「私の東大論」（刊行時タイトル『天皇と東大——大日本帝国の生と死』）をようやく終りにすることができた。その最終章で「東京大学の八月十五日」について書いた。

一九四五年八月十五日、東大キャンパスにいた全学生、全教職員が安田講堂に集められ、そこで終戦の詔勅を聞いた。その中に、アレルギー性疾患の解明、免疫グロブリンEの発見者として世界的に名高い、石坂公成氏（元ジョンズ・ホプキンス大教授）の若い日の姿があった。石坂氏は、まもなく始まる本土決戦で、自分の寿命もあと二、三カ月と思っていたので、終戦の報を聞いて茫然自失になったという。

これを書いた後、そういう体験をした石坂氏がまだお元気なら、他にも同じ八月十五日に安田講堂で終戦の詔勅を聞いた人がいるはずだと思った。その生き残りをたくさん集めて取材したら面白いに違いないと、「文藝春秋」の編集部に提案したら、早速取材班を編成して動いてくれた。思った通り、面白い話が続々出てきたので、それをまとめて「文藝春秋」の翌月号（〇五年九月号）に「東京帝国大学が敗れた日」を書いた。しかし、取材内容があまりに膨大になったので、雑誌に収録しきれず、大部分はインターネットの「文藝春秋」のページに特設ページを作り、そこに収めるという苦肉の策を取った（その内容は「語る会」当日の配布資料に全部収められた）。

年末に『天皇と東大』を刊行した後、それだけ生き残りの人がいるなら、その体験を聞く会を翌年の八月十五日に同じ安田講堂で開催してみてはどうかと思いついた。

「八月十五日と南原繁を語る会」は、第一部と第二部に分かれ、第一部の「東京大学の八月十五日」について語る部分は、この発想が実ったものである。はじめは、の安田講堂で終戦の詔勅を聞いた人々にもう少したくさん出てもらうつもりだったが、高齢者が多かっただけに、〇五年の取材時はまだお元気だったのに、〇六年になってみると大集会で話すのももう無理という方々が続出して、結局、実体験を聞けるのは、石坂公成氏と細谷憲政氏の二人だけに留まった。こういう意味でも、もうあのような会は二度と開けないだろう。

第一部の石井紫郎東大名誉教授の話「東大キャンパス 二つの接収計画」は、当日配布資料で配った石井<sup>（註）</sup>勲氏（終戦前後の東大事務局長、石井名誉教授の父君）の回想録『東大とともに五十年』に書かれた二つのエピソードを解説するものだが、これは二つとも仰天するような秘話である。本土決戦になっていたら東大本郷キャンパスが首都防衛の最前線司令部になるところだったのだし、終戦後は、占領軍の総司令部（GHQ）が置かれるところだったのである。それを時の総長（内田詳三）と法学部長（南原繁）と事務局長（石井勲）が押し返してしまうのだ。大学は時のスパーパワーに対しても、それだけの抵抗力を持っていた。

この回想録を入手したのは、『天皇と東大』を上梓した後だったので、その内容を同書に織り込むことはできなかった。しかし、このエピソードはぜひ皆に知ってもらいたいと思つて、「語る会」のプログラムと配布資料に織り込んだのである。

戦後憲法レジームを見つめ直す

「八月十五日と南原繁を語る会」を実現させたもう一つの大きな偶然は、会の準備過程となった〇五年から〇六年にかけての日本が、大きな歴史の転換点に立つことになってしまったという状況だろう。

戦後六十年を経て、いまや戦後レジームを全否定し、憲法改正を第一の政策目標に掲げる人が国民的人気を集めて総

理大臣になっている。ちょっと前であれば、そのような政治家は「危ない」政治家とみなされ、総理大臣になるはずもなかったろう。このような大きな状況変化が日本の現実政治の上にはつきり現れてきたのが、会の準備を始めたころ（小泉政権時代末期）だった。

あの会の準備期間は驚くほど短い。手元の資料によってみると、具体的には〇六年五月早々に、まず会場を手当てするところから始めている。つまり実質準備期間は三月月あまりしかなかったのである。それしか時間がなかったにもかかわらず、計画を公にすると驚くほどトントントン拍子にことが運んだ。それだけスムーズに事が運んだのも、出演者から支援スタッフに至るまで、声をかける人すべてが、二つ返事で喜んで協力してくれたからである。

配布資料を作ってくれた東京大学出版会と文藝春秋、『南原繁著作集』の多数のページの版面をそのまま配布資料に収めさせてくれた岩波書店、「南原繁とその時代」というビデオクリップを作って当日上映してくれたNHKは、当日の模様もまるまる「BSフोरラム」の特集で流してくれた。朝日新聞はこの会があることを大々的に報道してくれた。このようなメディアの協力もこの会を成功させた陰の力だ。

東大当局、法学部当局がまた協力的だった。テーマが東大の歴史と初代総長の事跡であり、出演者全員が東大名誉教授、現役教授、それに東大の有名卒業生たちだったということもあり、小宮山宏総長から事務当局、守衛さんに至るまで全面協力してくれた。

それだけ多くの協力が得られたというのも、南原繁という人物の伝説的人徳によるところが大きかったに違いない。しかしそれ以上に、時代の状況変化が手伝ってくれたところがあると思う。〇五年九月の郵政民営化問題による突然の解散総選挙で小泉自民党は歴史的な大勝利を博した。それ以後、今日に至るまで、小泉—安倍両首相ラインで国政を思いのままに牛耳る体制ができた（いわゆる「〇五年体制」）。世の中は一挙に右傾化し、きな臭い空気が漂いだしていた。そのような状況変化に危機感を持つ人がそれだけ多かつたということも、この会を盛り上げてくれたと思う。ちようど会の準備を始めたころ、すでにポスト小泉の最有力候補の座を固めていた安倍官房長官が、ほとんどその政見発表のような感じで、『安倍晋三対論集 日本を語る』（PHP研究所）という本を出版した。その中で、対論者・櫻井よしこ氏とのやりとりという形で、安倍氏は憲法改正についてこんな風に語っていた。

櫻井 安倍さんは遠くない将来、総理・総裁になられる方です。憲法改正が、課せられた歴史的な課題だと捉えておられるということですか。

安倍（略）これは私というより私たちの世代が責任を持って取り組まなくてはいけないことです。次の総理がこの問題に手をつけなければ、日本の未来は非常に暗いものになってしまいます。

櫻井 次の総理ということは、小泉さんが任期いっぱい総理をなさるとしても、ほんとに手の届くような未来のことです。

安倍 ええ。そういうことになると思います。もう指呼の間であると思いますね。

このころから、安倍氏は、戦後レジーム全否定論と憲法改正最優先の政治課題論を堂々とあらゆる場で唱えはじめていた。憲法に記されていることが「レジーム」そのものなのだから、憲法改正論と戦後レジーム全否定論は平仄がピタリと合っている。

安倍首相は、戦後レジームをネガティブに捉え、これを根本的に変革してしまうことこそ、日本国のために最もよいことと考えているようだが、私の歴史の見方は安倍首相とは正反対である。戦後レジームこそ、数千年に及ぶ日本の歴史の中で、最もポジティブに捉えられてしかるべきレジームであると私は考えている。はっきり言って戦後レジームをポジティブに評価できない人は、歴史を知らない人だと思う。あそこで（一九四五—四六年）戦前レジームから戦後レジームへの一大転換が起きなかつたとすれば、日本にはいまでも明治憲法レジーム、大日本帝国レジームが続いていたことになる。それが国家レジームとしてどれほど狂ったレジームであつたか、ある年代以上の人にはいままさけ言うまでもないことだろう。

しかし、困ったことには、ある年代以下の人は、歴史的知識が根本的に欠如しているため、ある年代以上の人には自明のことがまるでわかっていない（おそらく安倍首相もその一人）。戦前の明治憲法レジームがどのようなレジームであつたか、まるで知らないのである。それ以前と比べることができないから、戦後憲法レジームのどこにどれだけ価値があるのかわからないのである。

価値があるのかわからないのである。

明治憲法レジームに比べて、戦後憲法レジームは、国家的政治経済社会システムとして圧倒的に優れたレジームである。

システムとして原理的に優れているだけではない。パフォーマンスがまた圧倒的に優れている。明治憲法レジームは、途中で起きた数々の不具合を全部無視するとしても、運用開始五十六年目にして、ついに大破綻（四五年敗戦）をきたし、国家を滅亡の淵に追い込んだ。

それに対して、戦後憲法レジームは、すでに明治憲法レジームの全存続期間をはるかに上回る長期にわたって安定的に機能している（途中、多少の不具合はあったが）。それだけでなく、歴史上、戦後憲法レジームはいまだかつてないような経済的繁栄を日本にもたらした。これだけ平和で、民主的で、平等な社会が長期にわたって繁栄しながら続いたことは、長い日本の歴史においてはじめてのことである。日本は二十世紀から二十一世紀にかけて、世界で最も成功した国家レジームを作った国として自国を誇りにしてよい。

これほどすぐれたレジームを持つ国家の首相でありながら、そのレジームをもつばら非難し、破壊することばかり考えている安倍首相は、政治家として尋常ではない。

いまは、システムとパフォーマンスの両面から、冷静に戦後レジームを評価し直し、本当にそれをここで変えたほうがよいのかどうか、冷徹に検討すべき時と思う。

そのためにも、まずは戦後国家の出発点に戻って考え直してみようというのが、「八月十五日と南原繁を語る会」の基本的な発想だった。

それというのも、明治憲法レジームから戦後憲法レジームへの大転換にあたって、最も大きな働きをした人の一人が、南原繁だったからである。

### 再生への指針としての言葉とその力

戦後レジームの作り手として働いた人は、政界にも、官界にも、占領軍の中にも多数いたが、学界に身を置きながら、日本の国民全体に大きな精神的影響力を及ぼしたのは、何と云っても東京帝国大学の最後の総長であると同時に、新制東京大学最初の総長でもあった南原繁だった。

南原は大学総長であると同時に、勅任の貴族院議員として、新憲法制定、教育基本法制定、皇室典範改正などに直接関与し、多くの角度から戦後レジームの根幹的基礎作りに深くタッチした人でもあった。

南原繁の戦後日本の体制作りに果たした大きな役割に私が初めて気付いたのは、『天皇と東大』を書いていく上で、多くの南原関連資料に出会ったことよってである。資料（なかんずく『南原繁著作集』）を読めば読むほど、南原の人物の大きさが見えてきた。この人があったればこそ、敗戦直後、全国民が茫然自失状態にあった日本がなんとか再起を果たすことができたのだと思った。

南原がそのような大きな役割をいかにして果たすことができたのかというと、もっぱら言葉の力によつてである。

南原の言葉には、独特の人を動かす力がある。『天皇と東大』を書き進めるために、この時代に南原が発したことを書き写す作業を続けていると、いつの間にか頭の中で南原の言葉が鳴り響き、その言葉をリアルタイムで耳にした同時代の若者たちの感動を追体験することができた。

安倍首相は、戦後レジームをネガティブに捉えることしかできないようだが、歴史の現実としては、敗戦時の若い世代の人々は、あの誕生したばかりの戦後レジームの中に初めて生きる喜びと新しい国造りの喜び、そして未来に來たるべき社会への希望を見出していたのだ。

南原繁が東京大学総長であった一九四五年から五一年にかけての六年間は、敗戦によつて滅亡状態にあった国家の中で打ちひしがれた国民が、心身ともになんとか生きる力と希望を取り戻し、祖国の再生と復興に取り組み始める六年間だった。国家の滅亡から再生への大転換を図る上で、最も大きな指針の役割を果たしたのが、南原の言葉だった。

南原の言葉を読めば読むほど、この言葉を、現代の若者たちに読ませてやりたいと思った。現代の若者たちの多くが、小泉―安倍両首相のラインに安易に連なり、戦後レジームを否定する側に立つほうが正しいと思いつている。しかし、戦後レジームの問題をそんなに安易に考えるなど言つてやりたかった。戦後レジームを否定する前に、まずそれがどのような歴史的コンテクストの中でどのように生まれたのか、その経緯を知れと言いたかった。それを知るための最良の方法が、その日の集会で配布した南原繁の言葉の資料集（すなわち本書『南原繁の言葉』）を読むことである。



「八月十五日と南原繁を語る会」は、単に演者の話を聞くシンポジウムとして企画されたものではない。南原の歴史的発言を考える核にして、もう一度、日本という国家のあり方を考え直してみる会として企画された。

そのため、会は演者の話半分、配布資料半分の比で準備された。配布資料は合わせて単行本一冊ぐらいの分量になった（著作権等の関係で『南原繁の言葉』には収録しきれなかった分もある。逆に、本書に入っている南原の「第九条の問題」のように、当日の配布資料に入れたかったのに、入りきらなかったものもある）。

会が終るにあたって、私はこんなあいさつをした。

「これで会は終るが、会の趣旨である、南原繁の言葉を手がかりにして、日本という国家のあり方をもう一度考え直してみよう」という各人の頭脳にまかされた作業はこれから始まる」。

さて、会に出た人も出なかった人も、考える手がかりはここに全部ある。

注意深く読めばすぐにわかることだが、一つだけ注意を促しておく、『南原繁の言葉』に収録されている「学徒の使命 その一」が書かれた時期（一九四五年四月）と「学徒の使命 その二」が書かれた時期（同年九月）との間に、五カ月間の時間差がある。その間に敗戦が起き、戦前レジームは滅んだ。この二つの文章を比べて読めば、国家のレジームの変化というものが、国民にとってどれだけ大きな意味を持つか、すぐにわかるだろう。

近未来に予想される次のレジームの変化が、国民生活にどのようなインパクトを及ぼすか、いまから予想することは難しいが、とにかく拙速は禁物である。国家のレジームの変革は、限りなく慎重に考られ行われるべきものである。